

Title	「鶴」 : プロデュースへの情熱
Author(s)	内海, 紀子
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 14-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97691">https://hdl.handle.net/11094/97691</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「鵜」

— プロデュースへの情熱

子 紀 海 内

古谷綱武、弟の古谷綱正、檀一雄、雪山俊之（以上編集部）、犬養秀雄、内田辰次（経営部）からなる「鵜社」を発行所とする季刊文芸誌。第一輯が一九三四年四月、第二輯が同年七月に刊行された。小林朝治の版画をあしらった変形柘型・アンカット製本の本誌は、昭和初年代のクォーターリー「詩と詩論」（一九二八〜三一）を髣髴させる高雅で高踏的な雰囲気を持ち、書籍雑誌以外の広告が掲載していない。「装幀、組方、紙質、誠に上品な本」（「世紀」一九三四年五月号の尾崎一雄「創作月評」）、「すつきりした編輯ぶり」（「コキト」同月号の「新書散見」）と評される所以である。

本誌発刊のいきさつは古谷綱武『鵜』刊行の頃の思い出（日本近代文学館刊「鵜」復刻版別冊解説）一九三三年十月から翌年九月にかけて檀と一軒家に住んだ尾崎一雄の『なめくち横丁』（一九五〇・二、中央公論社）に詳しい。「新人」創刊号に掲載された檀の「此家の性格」に感銘を受けた古谷が、西武線中井駅の喫茶店でようやく彼を探し当てたその日から意気投合、二人の交友はやがて深まって、「スマートな季刊誌を作りたいという夢」を共有するに至る。古谷と檀は当時ともに二十代前半の青年であった。

文学青年達のひたむきな情熱の賜、と回顧的なまなざしでもって語られることの多い「鵜」の特徴を、以下で見てみよう。

「鵜社は文学といふより広く芸術にたづさはる者の精神的結合を意味する団体であると同時に、雑誌単行本を刊行してゆく事業的団体でもあります」（「鵜社をつくるに就いて」——リーフレット「鵜社便」第一輯（一九三四・四）に掲げられたマニフェストは、「鵜」メディアの特徴が雑誌よりもまずその組織性にあることを示している。

古谷達は六人という少人数で鵜社を結成し、そのうち数名が評論や小説を「鵜」に発表しつつ、鵜社の構成員をはるかに超える延べ九十六名の執筆者を本誌に迎えた。世代も所属同人誌も多岐に渡る執筆者は主として古谷の人脈に拠るといわれている。第一号の目次には、「評論」に阿部六郎、伊藤整ら、「詩篇」に室生犀星、佐藤春夫、金子光晴、中原中也ら、「文学時評」に神西清、中島栄次郎、浅見淵、長崎謙一郎、平林英子ら、「随筆・感想」に尾崎一雄、仲町貞子、相原（網野）菊、大岡昇平、坂口安吾ら、「書物展望」に保田與重郎ら、「創作」に太宰治、古谷文子、檀一雄の名が見える。

「このよつな「鷗」のありよつは、例えば十人を越える同人のほぼ全員が小説家志望だった「世紀」「木靴」等とはいささか異なるメディアの性質を示唆するだろう。先述のマニフェストに「私共の文学志望に利用するための過程としてつくつたものではな」と明言された通り、鷗社のメンバーが夢見たのは「文学建設運動の最も自由な道場」としてのネットワークを創出することであつて、彼らの目は雑誌刊行に留まらない広範な出版活動に向けられていた。「鷗叢書」「拔萃叢書」なる企画タイトルで、中谷孝雄『雑草』や檀『曾何と呂鈍の話』、浅見淵『コップ酒』他の出版と流通が企図されていたのだ。鷗社の、従来の同人雑誌を超えた、かつ単なる営利雑誌でもない文芸総合雑誌としての行き方を模索する活動には、プロデュースへの情熱と呼ぶべきものが漲っている。

また鷗社には年齢的な近しさに基づく共同体意識があり、彼らのマニフェストは常に「私共」と発話される。

一応の建設を終つた日本の文学は、こゝ数年、真面目なそして最も若い先輩達によつて、その解体反省期を過ごしてきました。(中略)浅薄だつたわが国の文学思潮に健全性を与へるため、身をもつてその殉教的捨石的役割を演じた人々の育成した風潮のなかで教養を受けてきた私共は、そのにめにとり、れ位な伝統的土台と楽天性を与へられたか知れませぬ。(「鷗社をつくるに就いて」)

鷗社の「時代的意義」を自らこゝ定義する記述からは、昭和初年代におけるプロレタリア文学の席捲と衰退、およびモダニズム文学の泡沫的隆盛(一九三一年から三三年頃までの「最近文芸思潮期の衰退期」(板垣直子『現代小説論』一九三八・七、第一書房)を通過した後を訪れた、いわゆる「文芸復興」期に文学を志した世代の自覚がほの見える。こういった世代論的傾向は、本誌第一輯における既成作家へのアンケート企画「何故書くか?」、編集後記中の「私達のジエネレーションの新文学建設」といった表現にも反復された。尾崎一雄は『鷗』創刊の頃「(「鷗」復刻版別冊解説)で当時を振り返っているが、「私などのようにプロレタリア派から痛めつけられた経験はない」若き古谷と檀の、「かげりの如きもの」を伴わぬ文学への純粹な熱情は、当時既に三十三歳だった尾崎の目には稀有なものととも反面危なっかしいものとも映つたよつだ。

さらに鷗社に集った 文芸復興 世代に顕著な傾向として、大正期に文名をなした志賀直哉に代表される既成大家への愛着と屈折が挙げられよう。「現代の三大文豪」武者小路実篤、志賀、佐藤春夫の研究特集号を組む意図を鷗社は持つており（彼らを敬愛した古谷の働きかけと推測される）、第二輯予告には「暗夜行路」の作品研究を予定しているところ。しかし実際に第二輯をひもといてみると、山岸外史「暗夜行路から」、志賀の人となりを表すエピソードをフラグメント的に綴り合わせた尾崎一雄「断片」、武者小路実篤「志賀のことを一寸」が各々志賀文学に触れているものの、「評論」「随筆・感想」のパートに分かれており特集には結実していない。

山岸は「暗夜行路」の価値を「人生に対する或る直截なる態度」にあるとし、時任謙作の造型を通して「思考の憂鬱者ではなくて思考の個人主義的な実践家である」作家志賀の特性を読み取る。「暗夜行路」の示す世界観は、常に自我の主張に終始している。山岸は「暗夜行路」における揺るぎなき自我の表出をやや批判的な態度ですくい上げているが、山岸の論旨の射程は自我の作家としての志賀の神格化、および昭和十年前後に前景化した自我という主題の議論にも介入するものと言える。

さて太宰は「鷗」第一輯に「葉」を、第二輯に「猿面冠者」を発表している。「葉」の同時代評としては尾崎「創作月評」（『世紀』一九三四・五）があり、「自我の感傷がのたうち廻つてゐる」、「要するに自我の高揚と陥没との交錯である」とテクストに現れた自意識をめぐるエクリチュールの運動性に注目しつつ、「読者には不親切な作」という表現を用いて「葉」の実験性つまり小説形式の破壊に言及した。古谷より一歳下、檀より三歳年長であつた太宰は当時二十四歳、鷗社と同様の 文芸復興 世代の新進作家として自意識の解体という主題の中に彼もまた積極的に自己の文学を関わらせてゆくのである。

\*\*\*\*\*

『鷗』の挿画を担当した小林朝治については、小林創編集発行『小林朝治版画作品集』（一九九一・一）や、須之内徹『帰りたい風景 気まぐれ美術館』（一九八〇・一一、新潮社）の「鷗のいる診察室」に詳しく、小林は一八九八年に長野県須坂市本上町で生まれ、金沢医科大学を卒業後、一九二七年から三一年に

かけて愛媛県北宇和郡吉田町にある町立吉田病院の眼科医長として赴任した。ちなみに吉田町には古谷綱武の妻の実家もあったという。

吉田町滞在中の小林の版画作品に、『鶴』（一九三二）がある。端整かつ理知的な作風により造型された鶴のモチーフは、太宰「葉」に登場する小説「鶴」との関連も想起させる。また芥川龍之介をモデルにした岡本かの子の小説「鶴は病みき」（一九三六）等にも連想を及ぼせば、当時において鶴は芥川的な研ぎ澄まされた理性と自意識を表す特権的なメタファーであったのだからつかと想像される。

その後小林は故郷須坂へ戻り、眼科医院を開業するかたわら、須坂洋画会、信濃創作版画会、日本版画協会等で活躍したが、一九三九年に若くして逝去した。「気分のおもむくまま太い線でぐいぐいと掻き上げたという印象が強いが、実は非常に繊細な神経を駆使されている」（森山明治、朝治版画と私のかかわり）。「小林朝治版画作品集」所収と評される小林朝治の版画「須之内徹は、『鶴』、『吉田風物詩集』といった作品について、「素朴で直截な詩情をたたえている」と評価している。



「鶴」「鶴社便」に用いられた  
小林朝治作のロゴ



小林朝治「鶴」（1931）  
（『小林朝治版画作品集』より）